

一貫性の多様な次元

—日常会話と思考の「自然な流れ」の解明に向けて—

高梨 克也

第1節 会話と思考の認知科学—その出発点として¹

1.1. 目的：思考の自然な流れのもつ相互行為的側面の解明に向けて

会話は流れ、思考も流れる。そして、両者の間には何らかの関連がありそうである。本稿ではこの両者の関係について、会話の流れは思考の流れの反映であると考えerよりは、むしろ、思考の流れはどのように「会話ができること」に依存しているか、という方向で考えたい。

ごく直観的に、思考とは想定連鎖であると考えてみる。すると、これらの連続する想定の間には何らかの内容上の関連がある。しかし、仮にこうした内容上の関係を「連関性」と呼ぶならば²、現実の思考の流れにおいては、先行する想定と潜在的に連関性を持ちうる想定のうち限られた一部のみが実現する。つまり、可能な連関性の中からその実現へは何らかの制約が働いているはずである。このとき、ある想定から次の想定への移行を支えているメカニズムはどのようなものであろうか。このメカニズムを会話における発話と発話者についての理解のメカニズムから考えてみたい。思考の流れを会話の構造から分析するのは、この流れに方向を与える要因が「聞き手を仮想すること」及び「行為を指向すること」という、会話のもつ相互行為的側面にあるという仮定のためである。

このように、直観的に考えれば思考と会話は相互に独立でないにも関わらず、モジュラリティーの仮定 (Fodor, 1983) に従えば、思考は中央処理系、言語は入出力系が、そ

¹ 本稿の目的は問題の見取り図を提示することであって、その解決ではない。あるいは、言い方を換えれば、本稿はこれまでの調査の「報告書」であるというよりは、むしろ今後の調査のための「企画書」としての性格が強い。しかし、とにかくその探求目標が広範であり一個人の手には負えないような場合には、こうした「企画書」を公開することにも何らかの意義があると考え、本稿を寄稿することとした。なお、一貫性への代表的なアプローチについては「文献解題」でも取り上げる。また、「書評」で取り上げる予定の Haselager(1997)にも非論証的推論についての考察がある。

² 「連関性」という用語は菅原 (1997) によるものであり、本稿でも談話内の部分間に見出される言及内容上の結びつきまたは連想を広く指すものとして用いる。註 16 も参照。

れぞれ独立に扱うことになってしまう³。まず、この仮定に従うならば心的表象の起源が不明になる。やはりその起源は自然言語とその日常的使用に求めなければならない、と著者は考える。しかし、こうした主張が論争的なものであり、すぐには解決不可能な論争に陥ることになるのは目に見えている。つまり、「いったい心的表象が自然言語に似たのか、それとも自然言語の方が心的表象と類似した構造になるのか」。おそらく後者の立場を主張するであろうモジュラリティーの提唱者（特に Fodor のことだが）からは、同時に、言語習得についての全体論的観点からは概念の獲得という現象が説明できない、という反論もあるであろう (Fodor&Lepore, 1992)。ここではこうした論争に深入りする余地も準備もないため、上述の立場は現在著者が仮定していること述べた単なる「声明」に過ぎないと思って頂いてもよい。ただし、それだけではあまりに無責任であるため、以下の論考がこの論争とどのように関わっているかを述べておく。

まず、以下では、談話理解やそのための推論がもつ相互行為感応的性格を明らかにしたい。より具体的には、一貫性関係の理解には複数のレベルでの「規則性」が関与しており、話し手がそのうちの相互行為レベル、すなわち、聞き手による（ある場合には潜在的な）「疑問」を考慮することは不可欠であるということを述べる。次に、本稿の範囲内では論じえないが、一部の発達心理学的見地からの考察によれば、言語習得には実際の相互行為状況が不可欠であり、「活動」することから独立に言語の習得について考察することはできない、と考えられる (Wertsch, 1991 など)。まとめれば、推論の構造には会話という相互行為への感応性が不可欠であり、こうした相互行為状況への依存性は、幼児期の言語習得の際の状況依存性と連続的なものであるため、思考は必然的に相互行為依存的な刻印を受けている、というのが、著者の最も大きな主張である。しかし、当面の本稿の目的は、こうした大きな主張の一部として機能すると共に、そこからある程度分離可能な「モジュール」の確立にある。

1.2. 各分野の有効概念と問題点

会話内のある発話を取り巻く関係として、次のような各分野においてさまざまな概念が提起されてきた。しかし、これらの関係の間にはさらに互いに相互関係がありそうである。また、それぞれの領域や概念には長所と短所がある⁴。

³少なくとも著者の知る範囲では、複数巻からなる認知心理学の概説書などのシリーズの中で、言語と思考を同一の巻で相互に関連づけて論じているものはない。

⁴なお、本稿では、会話内のある発話について、これらの諸関係がすべて満たされなければならないと考えるべきかどうかについての結論は保留せざるをえない。

1) 談話分析：一貫性

一貫性 (Coherence) : 主に、ある発話によって言及された世界内の事象と
先行発話の言及する事象との間の意味論的關係

*ただし、実際にこの術語のもとに扱われてきた関係はもっと多様であり、
またその分類はしばしばさまざまなレベルの關係の混合的な記述であるこ
とが多い。

一貫性などの談話分析は、従来、その焦点を一連の談話内に見出される諸關係の記述
におく傾向が強かったが (プロダクト重視)、当該の關係がなぜ実現し、他の關係はな
ぜ実現しなかったのかを説明することは困難である。また、従来、談話分析は主に書か
れたテキストの分析に基づいてその理論的枠組みを構築してきたため、こうした枠組み
を会話の分析に適用する際には、会話内の発話は行為の遂行でもあるという点、及び、
会話参与者には処理中の部分以降の情報を参照することができないという点には十分
注意しなければならない。なお、第2節でも述べるように、近年の談話分析はプロダク
ト重視の静態的分析から脱却しつつある。

2) 語用論：関連性、適切性

関連性 (Relevance) : ある発話によって表明された想定と聞き手の認知環境
との關係

適切性 (Felicity) : ある発話が遂行する発話内行為と状況、特に話し手 (や先
行発話行為) との關係

「適切性」(Austin, 1962) や「関連性」(Sperber & Wilson, 1986) などの語用論的な
概念はある発話の現実の実現を説明することを目指したもののだが (プロセス重視)、主
に単一の発話のみを分析単位としている。また、悪いことに、共に語用論の中心概念で
あるところの「適切性」と「関連性」の間の關係も、従来きわめて不明確であったよう
に思われる。このことは、ごく単純化して言えば、発話行為論には談話理解の際の推論
の役割についての考察が欠けており、他方、協調の原則 (Grice, 1975) や関連性理論に
おいては発話のもつ行為としての側面及び行為間關係についての体系的な扱いがなさ

れていない、ということに由来する。また、語用論的手法を用いる際の注意点は、ある発話を理解する際の問題は必ずしもその時点で逐一完全に解決される必要はなく、ある部分は暫定的なまま先送りにされたり、その場で不明な点を問い返しても構わない、という点である。会話における個々の発話は常に問い返しを受ける可能性を持っているという点を考慮していないという点では、語用論にもプロダクトの事後的な分析に止まっているという側面があるともいえる。

3) 会話分析：連鎖性（隣接ペア・トピック・物語構造・リペア）

連鎖性 (Sequentiality)：ある発話行為と先行発話行為との行為間関係

会話分析の立場からの主張によれば、会話参与者による進行中の (on-going) 会話の理解にとって、連鎖性のような会話構造への指向が不可欠である。つまり、会話参与者は行方の見えない進行中の会話を会話の連鎖構造を基にして理解するということがある。こうした観点は本稿においても重要な役割を果たす。なぜなら、この主張こそが従来の談話分析や語用論のもつ上述の問題点を補完するものだからである。しかし、逆に、会話分析は参与者の心的過程を正面から分析の対象とすることはない⁵。従って、会話と思考の相互関係を分析するためには、会話分析による知見もまた上記のような諸概念によって補完される必要がある。会話を支える認知科学的構造の解明にはこれらの各領域間の相互補完が不可欠である。

第2節 一貫性についての先行研究（主に談話分析における）

会話内の発話を支持する上記のような諸関係のうち、最も広範に論じられ、同時にその内実についての見解の一致が最も乏しい概念は、一貫性 (coherence) であろう。その理由は、もともと一貫性という概念が談話理解者のもつある種の直観を出発点とする概念であり、これについての研究はいわばこの「直観」の内実を明確に定義可能なものとするを試みるものであったということにある。逆に言えば、当然ある定義を提起したとたん、この定義に反するようなある例にも「直観的には一貫性があるといえるので

⁵あるいは一部の「硬派」会話分析研究者にとっては、これは意図的な回避であったのだが、少なくとも著者にとってはこの方向性が必ずしも広く説得的であるとは思われない。

はないか」という反論を受けることになる。もちろん、ここで各研究者が「われわれにとっての一貫性」の範囲を定めてしまうということも可能ではあるが、本稿はこれとは逆の方向で論を進める。重要なのは、一貫性についての「直観」の方であり、「定義」の方ではないからである。従って、一貫性という概念を扱う際の本稿の方針は、従来各領域の各研究者によって「一貫性」という術語で焦点を当てられてきた現象の多様性をまず俯瞰し、これを他の諸概念と関連づけることによって明確化していく、という方向である。よって、「一貫性」という概念について定義することはしない。

現在に至るまで、一貫性についての研究が最も盛んな領域は談話分析である。この領域は「テキスト言語学」とも呼ばれることから明らかなように、談話内の文を越える規則性の考察を焦点としており、その考察主題の一つとして、直観的に感じられる文間の関係のことを広く「一貫性」と呼んできた。この領域は従来書かれたテキストに見出される関係の静的な記述に重点を置く傾向にあったが、近年談話の理解や産出の際の認知過程の解明により大きな重点が置かれつつある。従って、本節では、談話分析の領域での一貫性の研究のうち、より認知的と思われる研究を検討する。便宜上、ここではこれらの研究を、一貫性の源泉を命題間関係という言葉と内容からは独立のより抽象的な談話構造に求めるものと、これを談話のトピックという記述内容レベルに求めるものとに大別する。その際の本節の目的は、一見認知的であると見なされるこれらの研究のもつ認知的研究としての不明確さや不十分さを明らかにすることにある。

2.1. 命題間関係による一貫性へのアプローチ: Sanders et al.(1992,93)

Sanders, Spooren&Noordman (1992, 1993) は「一貫性関係 (coherence relation)」を「二つまたはそれ以上の談話分節単位 (segment) がもつ、それぞれの分節単位の単独の意味からは記述できない意味側面である」と定義している。彼らによれば、談話を理解するということは当該のテキストについての一貫性のある心的表象を構築することであり、一貫性関係は認知的実体 (cognitive entity) である。また、一貫性についての研究は記述的適切性 (descriptive adequacy) と心理学的妥当性 (psychological plausibility) を共に満たすものでなければならないとされ、この観点から、代表的な先行研究である Mann&Thompson (1986, 1988) の修辞構造理論 (Rhetorical Structure Theory, RST) には記述的適切性は認められるものの、心理学的妥当性は認められないと見なしている。これは、ごく単純化していえば、Mann&Thompson の分類には基準

が欠けているため、その分類は恣意的なリストに過ぎない、という批判である。これに対して、自らはその基準として、次の4つの原基 (primitives) を提唱している。

[表1] Sanders et al. の4つの原基 (primitives)

- 1) 基本的操作 (basic operation) : 因果的 (causal) / 付加的 (additive)
- 2) 一貫性の源泉 (source) : 意味論的 (semantic) / 語用論的 (pragmatic)
- 3) 分節単位の順序 (order of the segments) : 基本的 (basic) / 非基本的 (nonbasic)
- 4) 極性 (polarity) : 肯定的 (positive) / 否定的 (negative)

これらの4つの基準の組み合わせによって、計12の一貫性関係が得られることになる(付加の場合には単位の順序の区別はない)。ここではこれらの関係をすべて検討することはせず、後にその一部のみを検討する。まずその前に、これらの4つの原基の実質について検討しておこう⁶。

はじめに、因果的/付加的关系の区別における「因果的」についてであるが、これがどのような意味で因果的であると言えるのかは不明である。この基準を次の意味論的/語用論的关系の区別と組み合わせて考えた場合、意味論と語用論の両レベルにおいて「因果的」によって名指される機構が同一であるとは考えられない。例えば、第4節で述べるように、「因果的」の解釈はどのような推論構造を仮定するかに架かっている。

次に、意味論的/語用論的の区別についてであるが、この区別は一貫性の研究の他、談話標識 (discourse marker) の研究においても用いられている区別である⁷。この区別は一見妥当なものであるが、しかし、意味論的レベルにおいても語用論的レベルにおいても、当該の関係が適切かつ必要不可欠な関係であるのはなぜであり、どのようにしてであるのかを解明しようとする試みはほとんどなく、その意味で記述的区別に止まっている研究が多い。このあと紹介するように、意味論的レベルでの関係の理解には言及世界内の事象についての体系的な背景知識が関与しており、その点ではこのレベルでの関係はトピックによる一貫性と類似しており、また、第3節で考察するように、語用論レベルの関係の理解には関連性の認知や会話構造への指向が不可欠である。さらに、この両レベルは相互依存的であるため、相互行為の状況から独立にある関係が意味論的であ

⁶なお、本稿においては4)の極性の区別は重要ではないため、以下では扱わない。

⁷Schiffrin(1987)による'so'と'because'の分析におけるIdeational structure/information state/action structureの区別など。ただし、本稿は、これらのうちの第二のものは第三のもの一部であり、両者をまとめて「語用論的」と考える。これは、第二の関係が第三の関係と異なっている点は、この関係において問題となる発語内行為が「陳述」であり、「陳述」のみがその誠実性条件として真偽を含んでいるという点のみである。発語内行為の類型とそれぞれの誠実性条件についてはSearle(1979)参照。

るか語用論的であるかを決定することはできない。基本的/非基本的順序の相違もこうした相互行為的観点から決定されるものである。また、第4節で考察するように、この区別を統一するような推論図式を考えることも可能であるかもしれない。

要約すれば、彼らのいう命題間関係が談話理解の際の推論においてどのような役割を果たしているかというプロセスは不明である。第3節以降で論ずるように、こうした命題間関係の構造とその必要性は談話や会話の理解の際に必要な推論のメカニズムによって決定されるものである。

2.2. 一貫性へのトップダウン的アプローチ：Givón (1995) 他

Givón (1995) は、一貫性をテキスト自体のもつ静態的な特性ではなく、テキストを産出・理解する際の認知処理過程による特性であると考えている。この主張は旧来のプロダクト重視の談話分析からプロセス重視の研究への移行を端的に示している。また、一貫性の理解の際の認知プロセスには、文法的手がかりに基づく (grammar-cued) 処理と知識駆動型 (knowledge-driven) の処理という二つの側面が同時に関与している。しかし、このうちの後者の知識駆動型の処理の内容を明らかにしなければ、一貫性へのトピックによるアプローチの真の動態性を判断することはできない。

トピックによる一貫性は、談話内の語句のもつ単なる意味的連関性以上のものである。逆に、こうした語彙による意味的連関性しか持たない会話や談話は単なる「連想ゲーム」となってしまう。従って、知識駆動型の一貫性理解には語彙間の連想よりも大きな知識構造が関与していると考えざるを得ない。Brown&Yule (1983) は、談話における一貫性の理解には文法的手がかりによるボトムアップ的な処理と言及内容に関連する体系的知識構造を用いたトップダウン的な処理という二つの側面があるという、上述の Givón によるものとほぼ対応する区別を行なった上で、トップダウン的な一貫性の理解に用いられる、フレーム (Minsky, 1975) やスクリプト (Schank&Abelson, 1977) などの背景知識構造 (スキーマ) の候補を提示している⁸。

Trabasso, Suh&Payton (1995) は物語テキストの一貫性理解におけるトップダウン的処理の効果について考察している。彼らによれば、物語の一貫性の理解には、登場人

⁸本稿では、「フレーム」と「スクリプト」はそれぞれ言及された事象間の空間的配置と時間的連続に関する知識構造を指す、より狭義の用語として (長尾, 1988)、逆に、「スキーマ」は「フレーム」や「スクリプト」を含むとともに、より広く、後述する登場人物の目標や会話構造についての知識などの、談話理解のある時点において活性化されることによって、談話の進行についての予測を生み、また後続部分の理解の際の推論における利用が可能になるような知識構造ないし体系的心的表象一般をさす用語として用いる。

物の一連の行動をより上位の目標に関連づけて理解することが必要である。言い換えれば、物語理解者は登場人物の個々の行為の意図を上位の目標に結びつけ、登場人物についての階層的プランを構築することによって、一貫性を理解しているということである。なお、こうした階層的プランの形成は単なるスクリプトの使用とは異なるものである。スクリプトはある状況での行為や出来事の通常的な時間的連鎖についての、いわば一次元的な知識構造であるのに対して、プランは未知の状況や一見通常とは異なる行為連鎖を理解するために用いられる二次元的な知識構造であり、両者はその発動される状況が異なるのである。あるいは、スクリプトは予測は生むが問題の解決には用いられないといってもよい。従って、物語の一貫性理解にとって重要なのは、正確にはスクリプトではなくプランである⁹。なお、両者の相違については、第3節で再度言及する。

まとめれば、一貫性へのトップダウン的アプローチは、一貫性理解のために必要な背景知識やこれを用いた推論のメカニズムの一部を解明しているといえる。しかし、上述の Trabasso et al. の主張は物語理解についての実験室実験に基づくものであるため、これを日常会話内で自発的に生起する物語の理解に適用するためには、物語部分とこれを取り巻く会話部分との関係という、もう一つ別のレベルに関する考察が必要となる。言い換えれば、ここまでで検討してきた研究には、談話を行為として理解するという、より上位のレベルの推論メカニズムについての視点が欠けている。つぎの第3節ではこの点について考察する。

第3節 一貫性の相互行為的次元

前節においては、談話分析の領域における一貫性についての考察には推論メカニズムの不明確さと相互行為レベルの構造に対する視点の欠如という二つの問題点があることを指摘した。そこで、本節ではこれらの問題点を関連性理論による発話理解の際の推論プロセスについての研究と会話分析の知見に基づく会話構造についての定式化によって補完することを試みる。

⁹既に Schank&Abelson(1977)においても、「スクリプト」に対立するものとして「プラン」が仮定されている

3.1. 関連性理論の見地から一発話理解の際の推論構造

Unger(1996) は関連性理論に基づく談話連結詞と一貫性について考察している。第2節で指摘したように、Sanders et al. は Mann&Thompson の分類を記述的に適切ではあるが心理学的には妥当性を欠くものであると見なしているが、Unger によれば、彼らのいう4つの原基も発話理解の際の推論過程においてどのように用いられるかが明確にされていないという点では認知科学的に不十分であり、こうした推論について検討するためには関連性の原理との整合性という観点が不可欠であるとされる。また、一貫性関係を非明示的に伝達された関係的命題であるとする Mann&Thompson の立場に対しても否定的である。この主張は、談話連結詞の機能は概念的意味の伝達ではなく、連結された命題を理解する際の処理方法を表示することであるという、Blakemore (1992) らによる手続き的アプローチを踏襲したものであると思われる。

これらの批判にはもっともな点が多いが、しかし、Unger 自身も推論プロセスの具体的な内実を明示的に検討しているとは言えず、「関連性の原理に合致する解釈」という関連性理論の教条を繰り返しているに過ぎないため、関連性理論に同調するもの以外にとっては説得的であるとは思われない。

推論についての関連性理論の定式化も決して詳細かつ網羅的なものであるとは思われないものであり、これをそのまま具体的な事例の分析に適用することはできない。詳細化が最も必要な点は、(a) 新情報としてのある発話がどのように定式化されるか、及び、(b) 背景知識の想起はどのようなメカニズムによるか、という二点である。

まず、(a) については、次の定式化から明らかなように、「新情報の定式化」には言及内容のみに焦点が置かれる場合と遂行節を含む発話全体を入力とする場合の二通りがある¹⁰。

[表2] 表意 (explicature) の定式化

Speaker	V _{perf/att}	that	S + V.
(遂行節/命題態度)			(従属節)

(* V_{perf}: performative verb, V_{att}: propositional attitude)

¹⁰この定式化は岡本 (1998) の「発話理解スキーマ」を利用し、これを簡略化したものである。また、一見この定式化はすべての発話の深層構造に遂行節を仮定する「遂行仮説」(Ross, 1970) と類似しているが、この定式化は発話行為の理解の形式を明示するための便宜的なモデルに過ぎず、発話産出のモデルではない。第4節でも述べるように、本稿は発話産出と発話理解が同一のメカニズムの鏡像的反転となっているとは考えていない。さらに、このモデルの心的表象としての妥当性については結論を下すことのできる段階にはない。

しかし、関連性理論においては、どのような場合にどちらの部分に焦点が当てられるかを決定する基準は明示されていない。言い換えれば、当該の発話からの表意の定式化は、ある場合には従属節のみに焦点を当てた発話された命題のみに基づくものであるのに対して、他の場合にはこの発話された命題に加えて遂行節や命題態度をも含む、いわゆる高次表意 (higher-level explicature) の形式となると考えられているが (Blakemore, 1992; Wilson & Sperber, 1993)、どのような場合にどちらの定式化が用いられるかを予測する基準は不明である。なお、こうした焦点化の際、遂行節/命題態度と従属節の間にはゲシュタルト心理学における図と地の関係のような相互依存関係があると考えられる。この焦点化の問題については、第4節において再度考察する。以下では、従属節のみを焦点とする場合を「言及内容の理解」、遂行節/発話態度に焦点がある場合を「発話の行為としての理解」と呼ぶことにする。

なお、上記の (b) の「背景知識の想起」の問題に関しては、これは新情報の定式化に依拠して想起されるものであり、上記の意味論的/語用論的という区別と対応する形で、言及世界内の事象についての知識と会話構造や状況についての知識という二種類の背景知識が存在すると考えることができる。

しかし、こうした会話連鎖構造についての知識の内実が従来の語用論や談話分析において考察対象とされることはほとんどなかった。従って、この点を以下のような会話分析の領域での定式化を用いて補完することが有意義であると思われる。さらに、記憶あるいは知識構造についての研究における困難は、適切な知識の容易な想起をどのように実現するかという点にあることにも注意しなければならない。とかく言語学ではこの点を考慮せず、アドホックな知識構造を仮定していることが多いように感じられる。よって、第4節では、二種類の異なる背景知識の構造を仮定することの不合理性について検討する。

3.2. 会話分析の見地から一会話連鎖構造への指向

会話分析の領域においては、これまで会話連鎖構造の規則性についての以下のような定式化が行われてきた。ここでは、言及世界内の事象に関する関係も関連性のような発話の持つ語用論的側面も、共にこれらの相互行為構造の中に埋め込まれ、その中でのみ了解可能なものとなることを明らかにする。

[表 3] 会話分析における規則性

- ミクロ： 話者交替、隣接ペアと優先応答体系及び挿入連鎖
- マクロ： トピック、物語
- 問題発生時： リペア (Schegloff, 1992 他)

3.2.1. 隣接ペアと挿入連鎖：Schegloff (1990)

ここでいう「会話」とは、話者交替システム (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974) が作動している状況及びこれに基づいて生成された発話の集合体を指す。Schegloff (1990) は、こうした話者交替に則った隣接ペア (Levinson, 1983) という会話の連鎖構造自体が会話の組織的な一貫性を生み出す源泉であり、こうした一貫性はトピックによる一貫性とは部分的に独立で、また、これに優先するものであると主張している。彼は 125 行もの長大な電話での会話が、冒頭付近に現れた「要求」(隣接ペアの第一部分) と終わり近くでようやく述べられた「承諾」(第二部分) によってその骨格を形成されており、その間の会話がこの隣接ペアとの関連で用いられ、理解されていることを観察している。これは挿入連鎖 (inserted sequence) のうちのきわめてきわめて長大な例である。言い換えれば、隣接ペアの第一部分としての最初の「要求」から第二部分である「承諾」までの間のやりとりは「承諾」という第二部分を提示するための条件を整えるためのものである。会話参与者にとってこの会話はこうした観点から何の不自由もなく理解可能であるが、この理解可能性を支える基盤は会話参与者がすでに開始された連鎖による係争中の課題に指向している (oriented to) という事実にあるのであって、少なくともトピックによる言及内容上の一貫性によるものではあり得ない。まとめれば、Schegloff の主張は会話の一貫性を認知する際の相互行為レベルの構造への指向の重要性と優位性である。

Schegloff (1990) はこのことをもって、従来の一貫性関係の研究の不十分さを指摘しているが、既に第 2 節で分類したように、従来の談話分析における一貫性関係にはトピックによるもの以外にも命題間関係によるものもある。従って、命題間関係と隣接ペアの関係についてさらに考察しなければならない。

A) まず、Sanders et al. による意味論的關係と語用論的關係の区別 (表 1 ; 2)) のうち、隣接ペアに直接関係しているのは語用論的關係の方である。

(1) Argument-Claim (causal, pragmatic, basic, positive) (以下「根拠-主張」):

Nests or dead birds may clog up chimneys. (= p)

Therefore, have your chimney checked once a year and swept when necessary. (= q)

(鳥の巣か鳥の死骸が煙突に詰まっているのかも知れない。

だから、年に一度煙突を確認し、必要ならば掃除しなさい。)

この例が語用論的かつ因果的であるというのは、qが「命令」という発語内行為であり、pがこの発語内行為を遂行することの理由を述べているからである。しかし、pはqの発語内行為を遂行するためには必ずしも常に必要なわけではない。同様の例を隣接ペアという観点から定式化すれば次のようになる。

(2) A: 窓を開けてくれ。

B: a) (窓を開ける。) b) なんて?

A: 暑いんだよ。

「依頼」の場合と同様、隣接ペアの第一部分としての「命令」に対して、その第二部分として選好される応答は「受諾」であり、選好されない応答は「拒否」であると考えられる¹¹。(a)は受諾の例であり、これは必ずしも言語的な応答である必要はない。これに対して、(b)は「受諾」でも「拒否」でもない、「リペア要求」の例である¹²。従って、Aの「暑いんだよ」という発話は要求があったときにのみ必要となるものであるにすぎない。そして、この場合のAの二つの発話を連続させると次のようになる。

(2') A: 窓を開けてくれ。暑いんだ。

さらにこれらの発話の順序を逆にすると、上記の(1)の例と同様の一貫性関係となる。従って、(1)は受け手からのリペアの要求を予め予期して、これに対して先回りして「説明」を与えているという、かなり「高度な」連鎖なのであり、この順序の方がより基本的(basic)であるとは考えられない。

¹¹優先応答体系については Levinson(1983) 参照。

¹²より具体的には、ここでのリペアはいわゆる Third Position Repair (Schegloff, 1992) のうちの「連鎖上の含意に問題がある場合」の例に近いと考えることができる。

以上のことから、根拠-主張という一貫性関係をその基準となるそれぞれの原基の具体的な内実から考えるためには、隣接ペアと優先応答体系、そしてリペアという会話連鎖構造への参照が不可欠なものとなる。逆に言えば、これらの原基はその利用過程が明示されないならば、やはり単なる事後的な記述であると言わざるを得ない。

なお、同様の批判は関連性理論に対しても当てはまる。(2)の例を理解する際の受け手の推論過程においては、入力としての先行発話を定式化する際の焦点はその遂行節部分にある。前述のように、こうした焦点化を決定する基準は関連性理論においては明示されておらず、やはり、先行発話を「隣接ペアの第一部分として聞く」という、会話連鎖への指向を利用しなければならない。

B) 次に、意味論的レベルで一貫性関係についてであるが、実はこのレベルも自立的なものではなく、相互行為のレベルから独立であるとは考えられない。

- (3) a : 風邪をひいた。熱があるのだ。
 b : 風邪をひいた。雨に濡れたのだ。

a、bとも先行節は共通である。aにおける一貫性関係は例文(1)の順序を逆転させた主張-根拠型であると見なすことができ、これは語用論的一貫性関係であるとされる。これに対して、bは帰結-原因型であり、こちらは意味論的關係に分類されるため、会話の構造とは独立の關係であると思われるかも知れない。しかし、ならばbの後続節「雨に濡れたのだ」はなぜ述べられる必要があったのであろうか。その理由は聞き手が先行節に対して示すであろう疑問にある。

- (3') a) A1 : 風邪をひいたんだ。
 B : ほんとに?
 A2 : 熱があるんだよ。
- b) A1 : 風邪をひいたんだ。
 B : どうして?
 A2 : 雨に濡れたんだよ。

A 2 がともに B の疑問に対する応答になっているという点では、a と b は同一である。つまり、(3) の a、b における後続節はどちらの場合も受け手からの疑問に先回りして答えているのである。同一の先行節に対して話し手がこうした異なる判断をできることがある以上、一見意味論的とされる一貫性連鎖にも相互行為的側面は含まれていると言わざるを得ない。意味論的一貫性には言及事象レベルでの関係も含まれているというだけであって、意味論の関係ならば語用論的でないなどとは言えない¹³。

発話行為論的にいえば、(2) の先行節は「命令」であるのに対して、(3) の先行節は「陳述」である。これらの新情報を処理する際、「命令」の場合にはその定式化の焦点が遂行節に置かれる傾向が強いとは言えるかもしれないが、(3') の例からも明らかのように、「陳述」の場合にはその焦点は遂行節にも従属節にも置かれうる。しかし、上述のように、当該の状況においてその焦点がどちらに置かれるかを決定する基準は関連性理論によっては与えられていない。これらの連鎖を聞き手からの疑問という観点から考察するということは、二つの発話の間にリペア構造が潜在していると見なすことである。逆に言えば、先行発話の焦点化を解明するためには、会話内に実際に生じたりペアを分析することが出発点となる¹⁴。

C) さらに、一見意味論的な一貫性関係をもつ連鎖を語用論的であると見なすことができる場合もある。

(4) 雨が降っている。遠足は中止だ。

この例もまた、一見意味論的な関係である。しかし、この例の場合にも先行節に対する語用論的な疑問は存在しうる。

(4') A 1 : 雨が降っているよ。

B : それはどうしたの？

A 2 : だから今日の遠足は中止だと思うよ。

¹³ この指摘は談話レベルの意味論についてのものであり、文レベルの意味論に関する主張ではない。

¹⁴ ちなみに、(2') と (3 a) の後続節は、ともに先行する発語内行為に対する「説明」になっており、こうした「説明」において述べられる内容は先行発語内行為の適切性条件に関するものであることが多い。高梨 (1998) 参照。

言い換えれば、ここでA2はA1の聞き手に対する関連性を明示していると言える。従って、(4)についても、これを先行節が「主張」で後続節がその主張を行うことの「理由」であるという、語用論的な連鎖と見なすこともできる。従って、ある発話連鎖が意味論的であるか語用論的であるかを相互行為状況から独立に区別し、分類するということが自体にもそもそも困難があることになる。

まとめるならば、会話における一貫性は会話のもつ連鎖構造自体に由来するものである場合(A)や意味論的連鎖の背景に相互行為の側面が潜在している場合(B)、一見意味論的関係に見える連鎖が語用論的なものとしても分析できる場合(C)などがあるため、意味論的/語用論的一貫性関係の明確な区別は困難である。同時に、二つの談話単位の順序も相互行為レベルでの要因によって決定されるものである¹⁵。

次に、隣接ペアを超える、よりマクロな会話構造と一貫性の関係について考察するが、こうした場合においても、会話において言及されている事象についての関係は、会話構造の中に埋め込まれ、これを参照しながら産出・理解されているということが明らかにになる。

3.2.2. トピックと物語

トピックや物語などの会話のよりマクロな構造についての考察は会話分析の領域においても盛んに行われてきた。そこで重要なことは、この両者とも会話においてその開

¹⁵ 上述のように、Schegloff(1990)は発話行為間の関係によって支持される一貫性を隣接ペアと挿入連鎖という観点から考察しているが、会話は隣接ペアのみによって構成できるわけではない。また、後述するように、隣接ペアを超えるよりマクロな構造であるトピックも必ずしも明示的に導入されるわけではなく、後続の発話を支配できるほど常に強力であるとも思われない。従って、今後の課題として、隣接ペアの第二部分からの会話の「展開」にはどのような規則性があるか、あるいは、第二部分はどのような発話をこれに後続するものとして「条件的に関連性のある (conditional relevant)」ものとするか、という方向での考察が考えられる。この「条件的関連性」とは、通常は隣接ペアの第一部分が第二部分に対して付与する特性である。言い換えれば、隣接ペアの第二部分にも何らかの「第一部分としての」特性があるのではないかということである。他の発話と同様、隣接ペアの第二部分もリペアの要求に対して開かれており、また、リペアには発話の全面的な訂正もしくは言い直しからより緩やかな補足までのさまざまな段階があると考えられる。さらに、特に第二部分に関してはその第一部分に対する応答としての適格性の問題が常につきまとう。第二部分からの会話の展開の可能性のうちの少なくとも一部はこの点にあるのではないだろうか。Tsui(1991)は、「ある発話が先行発話と一貫性のある連鎖を形成するためには、この発話は先行発話の発話内意図が語用論的前提と関連するものでなければならない」という、一貫性規則 (coherence rule) を提唱している。しかし、この規則は隣接ペアの第二部分とリペア要求に関しては問題はないが、第二部分に後続するすべての発話がこの第二部分発話の発話内意図が語用論的前提と関連するものでなければ一貫性を欠くものとなるかどうかについては疑問が残る。よって、この規則の前提と後件を入れ替えて、「ある発話が先行発話の発話内意図が語用論的前提と関連するものであるならば、この発話は先行発話と一貫性のある連鎖を形成する」と修正するならば、第二部分の第一部分に対する応答としての適格性に多少なりとも関わる後続発話はこの第二部分と一貫性を有するという点を説明できるようになる。ただし、これでもまだ不十分であろうことはいうまでもない。

始及び終了を明示される（以下「境界づけ」と呼ぶ）ことが多いという点である。これによって、トピックや物語はこれに先行または後続する会話部分と関係づけられ、また、会話内において独自の相互行為上の機能を担うことになる。また、トピックと物語の会話連鎖上の相違は、後者が話者交替システムの停止を伴う構造を持つものに対して、前者はそうではないという点にある。さらに、トピックは必ずしも明示的に導入されるとは限らず、「境界づけられた/切れ目のないトピック推移」（串田,1997）に下位区分される。しかし、ここでは、物語の方にのみ焦点を当て、会話において生起する物語がこれを取り巻く会話部分によってどのように支持されているかを明らかにする¹⁶。

上述のように、Trabasso et al. は、物語の一貫性の理解には登場人物のプランに関する推論に基づくトップダウン的な処理が必要であると主張している。しかし、上述のように、発話には行為としての側面もあり、会話の一貫性はこうした発話行為間の関係による部分が大きいと同様、会話内で生起する物語に関してもその相互行為上の役割への考慮は不可欠である。ここでは、物語において記述された出来事についての理解がその物語の当該の会話状況での適切性についての判断に依存していることを指摘する。

会話において生起する物語は「前置き」と「評価」によって前後の会話部分から境界づけられている。会話のより形式的側面に即していえば、これらの標識は通常の話者交替システムの一時停止と再開を合図するものである。また、より機能的あるいは目的論的にいえば、こうした物語には直前の会話の内容と関連するある「ねらい」があり、「前置き」はこのねらいを予告し、「評価」はこのねらいの達成を確認し合うものである。

まず、「前置き」に関しては、例えば、Goodwin (1995) はこれを予期的標識 (prospective indexical) と見なし、これが（１）語られた出来事の適切な意味すなわち「評価」の仕方を理解するためと（２）物語の終結点を発見することを容易にするための、二つの機能を果たすと主張している。聞き手は形式と内容に関するこれら二点に留意しつつ物語を理解していくことになる。一方の「評価」もこうした「前置き」の線に沿って行われる。あえて分解すれば、「評価」には語られた出来事の帰結についての話し手による言

¹⁶ 串田 (1997) によれば、明示的なトピックの導入を伴わない「切れ目のないトピック推移」の場合、会話を進行させる要因は語彙間の「共通性」にあるとされる。もちろん、こうした「切れ目のないトピック推移」にも単なる語彙間の意味的連関性以上の制約が存在しているように感じられ、この制約は直観的には隣接ペアや物語の場合よりもゆるやかなものであると思われる。また、これを会話分析による従来の定式化を用いて考察することは困難である。また、菅原 (1997) は、会話参加者が進行中の会話のトピックとの結びつきや聞き手にとっての関連性を見無視して、それぞれの連想の赴くままに発話を展開していくさまを「連関性の分岐」あるいは「自己中心的な連関性」の追求と呼んでいる。この場合には、発話内容に対する制約は「切れ目のないトピック推移」の場合よりもさらに緩やかなもの、あるいは一見無制約にさえる。では、「切れ目のないトピック推移」の際の共通性を「自己中心的な連関性の追求」から区別する要因は何であろうか。当然、この問いは本稿での考察範囲をはるかに超えるものである。このように、従来会話分析が考察してきたようなトピックにはさまざまな未解決の問題があるため、本稿ではこれをこれ以上考察することはできない。

明（a 成分）とその物語の当該の会話状況における適切性についての聞き手による評価（b 成分）という二つの成分が含まれている。a や b が明示されない場合もあり、b は同時に a を兼ねることも可能だが、明示されるにせよされないにせよ、b は不可欠である。なぜなら、「前置き」や物語の本体をある出来事に対する語り手による評価（以下「物語による評価」）であると見なした場合、この b 成分はこの「物語による評価」を第一部分とする隣接ペアの第二部分であるからである¹⁷。

従って、会話において物語が生ずる場合には前置き-物語-評価（以下「物語の評価」）という構造が現れることになる。このうちの「前置き-物語」の部分は「主張-根拠」の一貫性連鎖であり、「物語-a 成分」の部分は「根拠-主張」の一貫性連鎖、また、「前置き」や物語と b 成分（「物語の評価」）の間には「物語による評価-同意」という隣接ペアが、それぞれ含まれていることになる。さらに、たとえ語られた出来事の進行の理解や登場人物の行動のプラン推論による理解に成功したとしても、語り手が何のためにその物語を語ったのかを理解できないならば、この物語はこれを取り巻く会話部分との間に非一貫性を生じさせる。また、たとえ言及世界に関する「なぜ」の疑問が生じないとしても、物語を話すこと自体に対する「なぜ」の疑問が生ずるならば、聞き手はこの物語を中止させることができるという意味では、物語に対する相互行為上の制約は物語世界内部での秩序に優先するといえるかも知れない。従って、会話における物語の一貫性の理解に関しても、会話構造上の規則性が言及内容間の連関性よりも優位にあることが分かる。

近年、コンピュータを利用した対話システムの設計において、コンピュータが対話者の発話意図をより上位の談話のプランと関連づけながら理解することの有効性が唱えられてきた (Moore&Paris, 1993; Grosz&Sidner, 1990)。つまり、上述のような物語の登場人物についての階層的なプランと同様、会話における対話者の行動についてもこれを階層的なプランとして扱うことができそうだ、ということである。こうした観点から前段落の主張を言い換えるならば、登場人物のプランについての理解は、これが談話プランについての推論の中に適切に埋め込まれていなければ必ずしも発動する必要はない、といえる。しかし、事態はこれほど単純明快ではない。第2節で言及したプランとスクリプトの相違と同様の議論がこうしたいわゆる談話の階層的プランに対しても当てはまるからである。つまり、問題のない状況における会話内の発話の理解はスクリプト的な期待によるものに過ぎず、必ずしもこうした場合にさえ談話のプランや発話の

¹⁷ 「評価-同意/不同意」の隣接ペアについては Pomeranz(1984) 参照

意図についての階層的な理解が必要であるとは考えられないのである¹⁸。理解上の問題が発生している状況において発動される推論と問題が生じていない状況における推論とは深さが異なっているはずである。あるいは、前者の状況を「理解」と呼ぶとすれば、後者のような状況はいわば「前理解」であり、必ずしも常に推論が関与しているわけではないということもできる。こうした点については次の第4節で検討したい。その前に、本節のまとめを若干定式化しておく。

3.3. 「説明的発話連鎖」の分類

高梨(1997,1998)では、日本語の文末表現「のだ」の機能はさまざまな「課題の設定」と通じて二つの発話を結びつけることにあるという知見(益岡,1991)に基づき、後続発話が先行発話のどのようなレベルに向けられた「課題」に対する応答になっているかという観点から、その機能を次のように分類している。

〔表4〕「P. Qのだ。」におけるPQ間の関係の種類

関係1：原因や理由の説明－QがPで表現された出来事の原因や理由である場合

関係2：判断の根拠－Qがある判断Pの根拠となっている場合

関係3：発話行為の正当化－Qがある発語内行為Pを行うことの理由となっている場合

関係4：関連性の明示－QがPを言い換えたり、別の角度から述べたり、要約したりしている場合

QがPによって言及された出来事についての意味論レベルでの説明となっているのは関係1のみであり、関係2～4のQはPの行為としての地位に関する説明である。なお、以下では、「のだ」の使用の有無や他の接続表現の使用に関わらず、発話間にこれらの4つの関係のうちのいずれかが含まれている連鎖を広く「説明的発話連鎖」と呼び、考察する。次に示すように、既出の例の多くも説明的発話連鎖の例である。

¹⁸ 意図についての推論が必要となるのは何らかの理解上の困難が生じている場合のみであり、出来事や会話が「問題なく」進行している状況においては、意図についての考慮は必ずしも必要ではない。詳細は高梨(1998)参照。

- (3 b) 風邪をひいた。雨に濡れたのだ。 →関係 1
- (3 a) 風邪をひいた。熱があるのだ。 →関係 2
- (2') 窓を開けてくれ。暑いんだ。 →関係 3
- (4) 雨が降っている。遠足は中止だ。 →関係 4

あるいは、上述の明示的遂行文形式による定式化（表 2）を用いるならば、関係 1 の場合には Q は埋め込み節を焦点としているのに対して、関係 2～4 では遂行節もしくは命題態度に疑問の焦点があるといってもよい。Q はこの焦点化に対応する形で異なる知識構造を活性化させることによって形成されるといえる。しかし、繰り返し指摘してきたように、関連性理論ではどのような場合にこの定式化のどちらの部分の焦点となるかを決定する方略は示されていない。また、前述のスクリプトとプランの相違と同様、これらの説明的発話連鎖において必要となる推論はあくまで「問題発生時」のものであるため、これがすべての発話理解の際に同様の形式で等しく用いられると仮定することには注意が必要である。こうした問題は、言い換えれば、会話状況に感応的な知識の呼び出しを可能にする知識構造はどのようなものか、という問題であるといえることができる。次の第 4 節ではこの点について考察する。

本節では、従来の談話分析における一貫性の考察は、命題間関係に基づくアプローチとトピックに基づく知識駆動型のアプローチの両者とも不十分なものであることを示し、これを関連性理論や会話分析による定式化によって補完する道を探ってきた。従来の談話分析の不十分な点は、(1) 一貫性の理解の際の推論プロセスが明快でない点、及び、(2) 一貫性には言及事象レベルでの一貫性の他に、相互行為次元における行為としての一貫性という視点が必要であるという点、の二点であった。しかし、上述のように、関連性理論における推論の定式化には不明確な点が多く、また、第 1 節でも指摘したように、そもそも会話分析は推論という心理的プロセスへの言及自体を回避してきた。第 4 節では、こうした推論プロセスについて、発話理解と発話の行為としての理解との関連という観点から考え始めたい。

第4節 一貫性と推論：アブダクション的理解と徴候としての発話

4.1. アブダクション的理解

McRoy&Hirst (1995) は発話行為の解釈や発話行為についての誤解のリペアをアブダクション的推論の観点からモデル化している¹⁹。彼らは発話解釈の決定と誤解の認知は発話から目標へのアブダクション的推論であると見なし、さらに、従来の対話モデルが発話解釈の決定のために対話者のプランについての推論を重視してきたのに対して、こうした推論の問題を主体のもつ次のような二種類の「期待」を利用して回避することを試みている。こうした方向性は、対話における誤解やリペアを会話参加者の言語能力にとって本質的なものとして積極的に利用し、また、誤解の認知を通常発話の理解の場合と同じプロセスによるものとして説明しようとしているという点において、本稿の主張に近いものである。

1) 発話行為の言語的意図 (linguistic intention) :

各発話行為が表現する命題態度（信念、欲求、意図など）について

2) 言語的期待 (linguistic expectation) :

各発話行為にどのような（発話）行為が後続するか

これらは聞き手が当該の発話ないし発話された命題をその先行条件となる他の要素とどのように関連づけて安定化させるかについての二つの方法であると思なすことができる。これがアブダクション的であるというのは、より単純に言えば、ここでの推論が当該の発話があることの帰結と見なし、その発生理由を求めるという方向での推論だからである。まず、1) は従来の発話行為論における意図の扱いを継承したものであり、言い換えれば、表意を定式化する際に表面的な発話形態を命題態度に帰属させることが容易であることが多いという事実を利用したものである。しかし、明らかなように、ある発話の表面的な言語形態のみからその命題態度やこれが遂行する発話内行為を一意に特定することが常に可能であるわけではない。この帰属に失敗した場合にはリペアが必要となる。2) は隣接ペアの第二部分を第一部分と関連づけることによって理解す

¹⁹ 彼らは産出と理解を同一のプロセスの逆方向での進行であると考えている点では、本稿の立場とは相違する。しかし、本稿では発話産出のプロセスについては考察できない。

る、言い換えれば、ある発話を隣接ペアの「第一部分への応答として聞く」という側面を明示したものである。しかし、第3節でも述べたように²⁰、隣接ペアを超えるレベルでの会話連鎖構造を利用した発話理解がどのように行われるかについての説明は不十分である。

さらに、1)と2)の両者には行為連鎖理解の際の階層的プランの利用とスクリプトに基づく予測の区別(第3節)にそれぞれ対応する側面があると考えられる。つまり、問題のない状況における会話内の発話の理解は主に隣接ペアのようなスクリプト的な期待に基づくものであり、こうした場合は発話意図についての積極的参照は必ずしも必要ではないと考えられる。従って、本稿では1)は主に発話行為の理解に問題が発生した際に、これをリペアするためのリソースとして用いられるものであると予測する²¹。

また、McRoy&Hirst はアブダクションが局所的な語用論的問題の解決や物語理解に適用されていることを指摘している。しかし、語用論レベルでの発話行為理解や誤解の解決と物語において言及された事象に対する理解とは発話の表意としての定式化(表2)の焦点が異なっていると考えられる。なぜなら、物語内の事象に関する理解すなわち「言及事象の理解」は従属節の命題部分のみを焦点とするものであるのに対して、発話行為の語用論的理解すなわち「発話の行為としての理解」の際の焦点は遂行節にあるからである。彼らのモデルが適用できるのは「発話の行為としての理解」の場合のみであると考えられる。

- (5) A: 太郎が来ないなあ。
B: きっと電車に乗り遅れたのよ。

- (6) A: 窓開けて。
B: 暑いのか。

ここでBが行なった推論は共にアブダクションであると見なしうる。前者は言及事象に基づく「意味論的な」連鎖であり、後者はBの発話がAの発話行為の理由(正確には誠実性条件の一部)を尋ねているという意味で「語用論的な」連鎖である。しかし、

²⁰ 註 15 も参照

²¹ ここでは、問題のない状況での発話理解には2)の期待のみで十分であり、1)の利用はリペアの際に限られる、というような強い主張をしているわけではない。そのような主張をするためには、「発話意図についての積極的参照」という表現の内実が「発話意図の理解」と認知プロセス上どのように異なるかを明確にしなければならないが、これは本稿の手に余る課題である。

どちらの場合にもBが行なった推論はアブダクションである。なぜなら、まず、Bの推論の引き金は、前者の場合にはAの発話によって言及された事象に対する「なぜ」の疑問であり、後者の場合にはAの遂行している発話行為に対する「なぜ」の疑問であるからである。両者の違いは次のような定式化によって明らかになる。

(5') 「太郎がまだ来ていない」と話し手は言っている。

表意の焦点

(6') 「窓を開けてくれ」と話し手は依頼している。

表意の焦点

では、こうしたレベルの異なる二種類のアブダクション的推論は互いに対立するものであると考えるべきであろうか。この問いに対する本稿の答えは、両者には対立する側面と類似しており融合できる側面の両方がある、というものである。まず、対立する側面は次のような例に現れる。

(3) a : 風邪をひいた。熱があるのだ。

b : 風邪をひいた。雨に濡れたのだ。

上述のように、(a)は語用論的な説明的発話連鎖である判断-根拠(表4の関係2)の一貫性連鎖であり、(b)は意味論的な結果-原因(関係1)の一貫性連鎖である。言い換えれば、(a)の後続節は先行発話の遂行節を焦点として、これに対する疑問の解決を試みるものになっているのに対して、(b)の後続節は先行節によって言及された事象自体を焦点とし、これに対する疑問を解決するものである。ここで注意すべきことは、先行節「風邪をひいた」を完全に疑っている聞き手が(b)の後続節のような説明を求めることはないという点である。その意味では、こうした二種類のアブダクションが用いられる状況は聞き手からの反論可能性を基準として相補分布しており、さらにいえば、語用論的疑問の方が意味論的疑問よりも優先するといえる。

しかし、次に論ずるように、逆に、これら二種類のアブダクション的理解には類似点もしくは連続性もある。

4.2. 二重一貫性連鎖と徴候に基づく推論

意味論レベルにおけるいわゆる原因-結果連鎖の多くにおいて、しばしば結果はより具体的かつ観察可能であり、原因は抽象的かつ直接観察不可能であることが多い。このことから、言及世界内の事象に関する結果節は同時に話し手の判断のレベルにおいては判断の根拠すなわち原因であり、原因節は判断の主張すなわち帰結であるという、二重かつ逆向きの一貫性連鎖（以下「二重一貫性連鎖」）が現れることになる。

(7)	春になった。 鳥が鳴いている	
言及世界レベル	<原因>	<結果>
判断レベル	<判断>	<根拠>

既に第3節で述べたように、こうした連鎖は、相互行為の状況においては聞き手の疑問を焦点として図と地へと区別される。つまり、二重一貫性連鎖は説明的発話連鎖としてみた場合にのみ、あるレベルが優先され、一貫性関係が決定できるようになるのであり、相互行為の状況から独立にどちらの一貫性関係が適切であるかを述べることはできない、というのが原則である。

しかし、このことを少し別の観点から考察してみよう。Grice (1957) は、ある事象Pが別の事象Qの「徴候」となっているというような場合、例えば、煙を見て「火事だ」と判断するような場合を、PがQを「自然的に」意味していると呼ぶ一方、これとは異なり、語や発話が何かを意味するという場合を「非自然的意味 (non-natural meaning)」と呼び、両者を区別している²²。この区別は、Grice (1975) の用語を用いるならば、発話に意味があるということは会話の原則及び格率によって保証されているのに対して、会話外の事象は会話の原則のような何らかの原則を遵守するものではないので、解釈者にとってはすべての事象が「徴候」として等しく利用価値を有するということは保証されていない、ということである。

しかし、所詮、非自然的意味を自然的意味から区別する特権性はこれだけである、とも言える。なぜなら、観察された出来事や発話によって言及されている出来事と同様、程度の差こそあれ、ある事象に言及する行為としての発話自体もまたある種の「徴候」

²²Griceによるこの区別はPeirceによる指標記号 (index) と象徴記号 (symbol) の区別と類似したものであると思われる。また、アブダクション的推論を重視する本稿の立場からは、Peirceによる推論についての探求を参照することも有効であると考えられる。しかし、こうした課題は今後の課題とせざるを得ない。

として利用できるものであるからである。つまり、発話は発話者の意図の徴候なのである²³。少なくとも、関連性理論によってもたらされた大きな進歩のうちの一つはこの点にあると考えられる。彼らのいうコードモデルから推論モデルへの移行の主眼は、発話理解のうちの少なくともある部分はコードに従ったメッセージの復元としてではなく、発話を徴候として用いることによって推論を発動することによるのだという点にある。従って、自然的意味と非自然的意味は、程度の差こそあれ連続的である。

この区別を連続的なものと見なすことによって、第3節で言及した「言及内容の理解」と「発話の行為としての理解」、そして、さらにその他の主に人間行為一般についての理解をすべて同一の推論形式によって扱うことへの展望が開かれる。なぜなら、まず、言及世界内の登場人物の行為についての理解は会話状況とは独立の一般的な行為の理解と同型であり、発話行為の理解もまた、他の行為理解と多くの部分において共通のものだからである(高梨,1998)。

ここでいう「徴候」という考え方は、Garfinkel (1967) のいう「ドキュメンタリー的方法 (documentary method of interpretation)」に通ずるものである。これは実際に見えている出来事や行為を「理解/説明可能 (accountable)」なものにするために、これを背後の基本パターンの「証拠 (document)」として解釈するという、実践的推論 (practical reasoning) の方法のことであり、さらに、その特徴は「外見」と「基本パターン」はともに単独では同定できない相互参照的 (reflexive) なものであるという点にあるとされる。言い換えれば、両者の関係は二つの逆向きの if-then 形式の知識に分解することができないものなのである。この観点を用いれば、上記のような言及事象レベルでの「原因」と「結果」の関係や判断レベルでの「主張」と「根拠」の関係も、それぞれ異なるレベルでの因果関係であるというよりも、むしろともにここでいうところの「ドキュメンタリー的方法」における「外見」ないし「徴候」と「基本パターン」との間の関係であると見なした方がよい。従って、二重一貫性連鎖は異なるレベルにある分離可能な二つの仮言命題の偶然的同期によって支持される関係なのではなく、双方向の推論に対等に利用可能な融合的背景知識 (以下「双方向的背景知識」) の産物なのである²⁴。もちろん、これまで述べてきたように、どちらの方向の推論が行われるかは当

²³ もちろん、他の徴候一般とは異なり、発話には情報意図に加えて伝達意図というものが存在する (Sperber & Wilson, 1986 参照)。しかし、伝達意図とは、言い換えれば聞き手への「呼びかけ」であるに過ぎず、伝達意図の認知が情報意図の理解を保証するということはない。

²⁴ こうした構造の知識の場合、二つの節は互いに他に対する「徴候」となっているともいえるため、ここで行われる推論は演繹的推論であると言うこともできる。ちなみに、関連性理論は発話理解の際に必要な推論は演繹のみであると主張している。しかし、本稿では、聞き手が抱く疑問によって推論が発動されるという点を強調するため、これを「アブダクション」と見なす。

該の発話が遂行節と従属節のどちらに焦点を置いて定式化されるかによって決定されるが、この二つの場合の推論において利用される知識がそれぞれ別個のものであると想定することには必ずしも必然性はない。

このように考えれば、こうした推論はアブダクションであるにも関わらず、多くの場合において妥当なものであることが多い、という事実も説明可能になる。人間は日常生活において、さまざまな「徴候」からアブダクション的に意味を引き出すことに長けているが、逆に、ある場合にはいわゆる後件肯定の誤謬 (fallacy of affirming the consequent) と呼ばれる推論も行いやすい、という事実も双方向的背景知識という形式の卓越性を物語るものであると考えられる。

最後に、こうした双方向的背景知識のモデルとなりうる候補の一つに言及したい。Thagard (1989) は仮説と観察命題、あるいは、ある仮説を支持する観察命題同士の間「説明的一貫性 (explanatory coherence)」に基づいて仮説を評価する計算論的モデルを提唱している。ここで強調すべき点は、個々の観察命題の真偽すなわち現実との対応だけでなく観察命題同士の全体論的整合性が重視されているため、仮説と観察命題の関係は単なる原因と結果の関係であるというよりは、むしろドキュメンタリー的解釈における「基本パターン」と「外見」の関係に近いものとして扱われている、という点である。これに対して、第3節で指摘したように、Trabasso et al. のいう説明的一貫性においては言及世界内における純粋に意味論的な関係のみが対象となっており、意味論的知識の相互行為レベルへの感応性を欠いているため、推論の双方向性という問題を扱うことができない。逆に、Thagard のモデルにおいては、「外見」と「基本パターン」の間の相互参照性すなわち知識や推論の全体論的性格はコネクショニズムモデルによってよく表現されているといえる。言い換えれば、このモデルは命題を単位とするコネクショニズムモデル ECHO を採用しているため、同時に行われるすべての推論を個々の if-then 形式の知識に分解する必要がなく、知識構造のもつ全体論的性質を考慮できるものとなっており、また推論の方向にも関わらない。

しかし、このことは同時に短所あるいは問題点でもある。なぜなら、Haselager (1997) も指摘するように、コネクショニズムモデルのユニットとして命題を採用すること自体が、分散的表象は表象能力に乏しいため、心的表象は構成素構造をもたなければならぬと主張する Thagard 自身の理論的立場と不整合をきたすからである。Haselager が概観しているように (「書評」参照)、仮定する心的表象の相違 (あるいは有無) によって対立する計算主義とコネクショニズムの両陣営には現在のところどちらにも長所と

ともに問題点がある。Thagard (1989) は両者の主張を融合しようと試みているものとも考えられるが、悪い言い方をすればこれは内部矛盾を抱えた折衷案であるとも見られ得る。従って、こうした矛盾に陥ることなく、知識の全体論的性格や推論の双方向性、さらには知識の相互行為感応性を実現するモデルを模索しなければならないが、これは今後の課題としなければならない。

第5節 課題と展望

本稿は会話における説明的一貫性連鎖を、その相互行為的次元を重視しつつ考察することによって、会話の進行により感応的な知識の構造を模索してきた。言い方を換えれば、ここで行なった作業は日常会話において現れる推論の「癖」を見抜こうとすることであった。しかし、柔軟な会話を可能にする柔軟な知識構造の定式化に向けて、本稿はやっと出発点に到達したという程度に過ぎない。従って、第1節で掲げたより壮大な主題に関しては、現在の段階ではっきりと述べられることはほとんどないといってよい。最後に、会話の研究に基づく思考の研究には早くもどのような困難が予測されるかを若干述べて、論を閉じたい。

かりに説明的発話連鎖を思考の流れの直接的な反映であると考えerならば、思考の流れの中には潜在的な聞き手の抱くであろう疑問がよく「内面化」されていると見なすことができるかもしれない。しかし、ことはそれほど単純ではなかろう。なぜなら、直観的には、思考には前進と後退の二方向があるという印象があり、ここでの説明的発話連鎖に現れているような流れは後退方向のみであるように思われるからである。もし、ある想定に何らかの問題がある場合には思考は後退し、なければ前進すると考えるならば、説明的発話連鎖の分析だけでは思考がどのように前進するかを説明することはできない。また、具体的に「前進」や「後退」とはどのような状態であるといえるのであろうか。さらに、こうした直線的イメージのみで思考をとらえようとする自体にも問題があるに違いない。これらの問いはすべて 21 世紀の課題とせざるを得ない。

参考文献

- Austin, J.L. 1962 *How to Do Things with Words*. Oxford University Press.
 (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978)
- Blakemore, D. 1992 *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell.
 (武内道子・山崎英一訳『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房、1994)
- Brown, G. & Yule, G. 1983 *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Fodor, J.A. 1983 *The Modularity of Mind: An Essay on Faculty Psychology*. The MIT Press.
 (伊藤笏康・信原幸弘訳『精神のモジュール形式－人工知能と心の哲学』産業図書、1985)
- Fodor, J.A. & Lepore, E. 1992 *Holism: A Shopper's Guide*. Basil Blackwell Ltd.
 (柴田正良訳『意味の全体論－ホーリズム、そのお買い物ガイド』産業図書、1997)
- Garfinkel, H. 1967 *Studies in Ethnomethodology*. Polity Press.
- Givón, T. 1995 Coherence in text vs. coherence in mind. (In Gernsbacher, M.A. & Givón, T. (eds.) *Coherence in Spontaneous Text*. John Benjamins: 59–115.)
- Goodwin, C. 1995 The negotiation of coherence within conversation. (In Gernsbacher, M.A. & Givón, T. (eds.) *Coherence in Spontaneous Text*. John Benjamins: 117–137.)
- Grice, H.P. 1975 Logic and conversation. (in Cole, P. & Morgan, J.L. (eds.) *Syntax and Semantics Vol.3: Speech acts*. Academic Press.)
 (清塚邦彦訳『論理と会話』第2章「論理と会話」勁草書房、1998)
- Grice, H.P. 1957 Meaning. *Philosophical Review*, LXVI: 377–388.
 (清塚邦彦訳『論理と会話』第8章「意味」勁草書房、1998)
- Grosz, B.J. & Sidner, C.L. 1990 Plans for discourse. (in Cohen, P., Morgan, J. & Pollacks, M. (eds.) *Intentions in Communication*. The MIT Press.)
 (永見武司訳「談話のためのプラン」in 安西祐一郎他編『認知科学ハンドブック』共立出版、1992)
- Haselager, W.F.G. 1997 *Cognitive Science and Folk Psychology: The Right Frame of Mind*. Sage Publications.

- 串田秀也 1997 「会話のトピックはいかにして作られていくか」
 (谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社)
- Levinson, S.C. 1983 *Pragmatics*. Cambridge University Press.
 (安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』研究社出版、1990)
- Mann, W.C. & Thompson, S.A. 1988 Rhetorical structure theory: Toward a functional theory of text organization. *Text*, 8(3): 243-281.
- Mann, W.C. & Thompson, S.A. 1986 Relational propositions in discourse. *Discourse Processes*, 9: 57-90.
- 益岡隆志 1991 「説明の構造」(『モダリティの文法』くろしお出版)
- McRoy, S.W. & Hirst, G. 1995 The repair of speech act misunderstandings by abductive inference. *Computational Linguistics*, 21(4): 435-478.
- Minsky, M. 1975 A framework for representing knowledge. (in Wilson, P.H. (ed.) *The Psychology of Computer Vision*. McGraw-Hill.)
 (白井良明・杉原厚吉(訳)『コンピュータービジョンの心理』産業図書、1979)
- Moore, J.D. & Paris, C.L. 1994 Planning text for advisory dialogues: Capturing intentional and rhetorical information. *Computational Linguistics*, 19(4): 651-694.
- 長尾真編 1996 『岩波講座ソフトウェア科学 15 自然言語処理』岩波書店
- 長尾真 1988 『岩波講座ソフトウェア科学 14 知識と推論』岩波書店
- 岡本雅史 1998 「コンテキスト変換としての発話理解」
 (『第2回社会言語科学会研究大会予稿集』: 58-63)
- Pomerantz, A. 1984 Agreeing disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. (in Atkinson, J.M. & Heritage, J. (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge University Press.)
- Ross, J.R. 1970 On declarative sentences. (in Jacobs, R.A. & Rosenbaum, P.S. (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. Ginn and Company.)
- Sacks, H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G. 1974 A simplest systematics for organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4): 696-735.
- Sanders, T.J.M., Spooren, W.P.M. & Noordman, L.G.M. 1993 Coherence relations in a cognitive theory of discourse representation. *Cognitive Linguistics*, 4(2): 93-

133.

- Sanders, T.J.M., Spooren, W.P.M. & Noordman, L.G.M. 1992 Toward a taxonomy of coherence relations. *Discourse Processes*, 15: 1-35.
- Schank, R.C. & Abelson, R.P. 1977 *Scripts, Plans, Goals and Understanding: An Inquiry into Human Knowledge Structures*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Schegloff, E.A. 1992 Repair after next turn: The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology*, 97(5): 1295-1345.
- Schegloff, E.A. 1990 On the organization of sequences as a source of 'coherence' in talk-in-interaction. (In Dorval, B.(ed.) *Conversational Organization and Its Development*. Norwood, NJ: Ablex: 51-77.)
- Schiffrin, D. 1987 *Discourse Markers*. Cambridge University Press.
- Searle, J.R. 1979 A taxonomy of illocutionary acts. (in *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge University Press.)
- Sperber, D. & Wilson, D. 1986 *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- (内田聖二他訳『関連性理論－伝達と認知』研究社出版、1993)
- 菅原和孝 1997 「会話における関連性の分岐－民族誌と相互行為理論のはざまで一」
(谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社)
- 高梨克也 1998 「フォークサイコロジとしての語用論－発話についての常識的説明の構造・機能・地位－」
(『日本語用論学会第1回大会 Program&Abstracts』: 47-54)
- 高梨克也 1997 「「のだ」の表す命題間の関係と課題設定」
(『デュナミクスことばと文化1』京都大学人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座: 42-58.)
- Thagard, P. 1989 Explanatory coherence. *Behavioral and Brain Sciences*, 12: 435-502.
- Trabasso, T., Suh, S-Y. & Payton, P. 1995 Explanatory coherence in understanding and talking about events. (In Gernsbacher, M.A. & Givón, T.(eds.) *Coherence in Spontaneous Text*. John Benjamins: 189-214.)

- Tsui, A.B.M. 1991 Sequencing rules and coherence in discourse. *Journal of Pragmatics*, 15: 111–129.
- Unger, C. 1996 The scope of discourse connectives: Implications for discourse organization. *Journal of Linguistics*, 32: 403–438.
- Wertsch, J.V. 1991 *Voices of the Mind: A sociocultural Approach to Mediated Action*. Harvard University Press.
- (田島信元他訳『心の声－媒介された行為への社会文化的アプローチ』)
- Wilson, D. & Sperber, D. 1993 Linguistic form and relevance. *Lingua*, 90: 1–25.
- 米盛裕二 1981『パースの記号学』勁草書房

Summary

The Multi-Level Analysis of Linguistic Coherence: Toward an Explication of Interdependency of the 'Natural Flow' of Conversation and Thinking.

Katsuya TAKANASHI

In contrast to the dominant tendency in cognitive psychology, it seems intuitive that human thinking and natural conversation are dependent on each other. Both are composed of segments connected with each other and both construct flow. This article focuses on so-called 'linguistic coherence' from several different points of view. This feature of discourse seems to relate strongly to these elements common to thinking and conversation (sec.1).

Hitherto, coherence has been examined predominantly in the domain of discourse analysis. Most of these analyses, however, have remained static and rather plain, describing the relations between segments that analysts have found *ex post facto* in already fixed and determined texts. As a result even some currently widely used taxonomies fail to distinguish between quite different levels of coherence relations and to consider interdependency among these levels. Therefore, this article considers how these difficulties might be addressed. Of central importance is the distinction between semantic and pragmatic relations of coherence. This distinction can be understood as one separating the interaction level from the order of the described world. Most researchers in discourse analysis, however, have examined only the former level of coherence (sec.2).

While philosophical consideration of speech acts has drawn our attention to the performative aspect of utterances, most research from this perspective concen-

trates only on the analysis of individual utterances, not on sequences. This article emphasizes the importance of the interaction level of coherence in constructing discourse using such formulations about conversation structure developed in the domain of conversation analysis as adjacency pairs and story structures. The merit of analytic tools formalized in this academic field is that they treat sequences of utterances primarily as sequences of actions and put emphasis on the orientation of participants toward the on-going conversation. It becomes clear that even apparently purely semantic coherence can be realized only in the frame of the interaction level of coherence (sec.3).

Conversation analysis also has its weakness, however. To examine the flow of thought from this interactional point of view in the next stage, not only conversation structure but also the form of inference which has sensitivity to, and enables the flexibility of, interaction must be made explicit in a fashion adequate for cognitive science. Relevance theory has started to consider inference-making during the understanding of utterances, but it remains unclear how listeners construct explicatures from surface utterances and how and what kind of structure of background knowledge they recall and use to derive implicatures. It is argued that the form of inference needed for understanding utterances in interaction must be dynamically and flexibly adjusted to the dimension of the utterance upon which the focus of understanding should be put. Finally, a hypothetical form of inference is advocated (sec.4).